

イギリスの階級について

On British class

松岡 美香¹

¹大妻女子大学大学院人間文化研究科

Mika Matsuoka¹

¹Graduate School of Studies in Human Culture, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：怒れる若者たち，階級，20世紀

Key words : Angry young men, Class, Twentieth century

抄録

イギリス文学の背景的特徴として、階級が挙げられる。現在のイギリスにおいて、階級という仕組みは表面上ではかなり隠ぺいされているが、実際には依然として、社会に何らかの影響を及ぼす力を持ち続けている。本研究では20世紀に焦点をあて、階級の変遷、階級を反映させた小説が一体どのようなものなのか、ということ考察していくことを目的とする。

1. いまだに残る階級意識

2000年5月にローラ・スペンス(Laura Spence)という英国北部のコンプリヘンシブ出身の18歳の女子高校生が、オックスフォード大学を受験したが不合格となった。彼女が当時通っていた高校の校長は、彼女の出身地が原因で不合格になったのではないかとマスコミに訴えた。更に当時の財務大臣ゴードン・ブラウン(Gordon Brown)がこの件に言及し、オックスフォード大学は未だに、階級を気にするようなエリート気質を持っていると批判し、「ローラ・スペンス事件」として社会全体に知られるようになった。この事件は21世紀になった今でも、イギリス社会に階級的な名残や考えがあることを裏付けるものである。

2. 階級の区分方法

まず階級はどのような基準で区分されるのか、という問題がある。

19世紀は、ドイツ出身の経済学者であったカール・マルクス(Karl Heinrich Marx)の考え方によって階級を区分することができた。彼は経済に重点を置き、支配する者と支配される者に区別していく方法を提案した。しかし20世紀に入ると、彼の考えた方法で階級を区別することが難しくなってきた。原因は、中産階級が労働者階級よりも増大し、2分化という考え方が困難になったためであった。

そこで20世紀では、ドイツ出身の経済学者マックス・ウェーバー(Karl Emil Maximilian Weber)の考え方によって階級を区分するようになった。彼は経済だけではなく、教育、技能、身分、民族を考慮した区分方法を提案した。しかし彼の考え方も時代の流れにそぐわなくなってきた。

20世紀半ば、新たな考え方が表れた。イギリスの社会学者であったジョン・ゴールドソープ(John Harry Goldthorpe)の考え方である。彼は職業的地位を階級の区分基準とし、7つの階級区分を提案した。以後、この考え方が主流となった。

3. 階級の崩壊

階級は第一次世界大戦を機に、徐々に崩れ始めたと考えられる。上流、中上流階級の中で士官になる素質を持った人材の確保が難しくなり、中下層階級から士官へと昇進させる道を選択せざるを得なくなった。イギリスは第一次世界大戦中、ソンムの戦いにも応戦し、困難を極めていた。多くの負傷者、死者が出ていたので、人材の確保が難しくなり、士官候補者の範囲を広げることになったのである。戦争中はこのように階級が上がった者でも戦争が終わると、元の階級に戻っていた。

また女性たちは階級を問わず、手に職をつけようとしていた。戦場へと駆り出された男性に代わ

り、女性が仕事をするようになった。また戦争で身内や恋人を亡くし、その悲しみを仕事で紛らすために、社会に進出する女性たちもいた。第一次世界大戦は以上のように、階級崩壊のきっかけになったと考えることができる。

4. 社会変化

20世紀初頭、産業の技術が化学と電気を取って代わられた。さらに国内の企業ではなく、植民地の企業に頼っていたため、植民地への投資が多くなった。こういった変化により、熟練労働者より半熟練労働者の需要が高まった。労働時間は1日9時間、週54時間を超えるものが多かった。

第一次大戦下では、イギリス国民が一致団結して戦争に立ち向かうというスローガン等が掲げられたが、労働者階級はこの戦争に協力的な姿勢を見せたわけでもなかった。大戦中でも小規模のストライキは多発していた。また軍需物資の生産のために、多くの労働力が必要とされ、長時間の労働を強いられるようになった。

大戦終了後、軍需物資の生産が激減した。さらに1920年の恐慌により、一層生産が落ち込んだ。その結果、大量の失業者が出た。特に産業の形態が炭鉱や造船といった古い産業から、サービス、電気、化学といった新しい産業に変化したため、古い伝統的な産業の失業者が多かった。

1950年代になると、イギリスは労働力不足に陥った。そこで政府は移民の導入を始めた。主に彼らは肉体労働に就くことが多かった。しかしこれは、イギリス人の失業率をさらに加速させるものだった。

1970年代になるとスタグフレーションが起り、労働者階級の人々は失業と物価高の影響を被った。その結果、労働組合が力を増し、ストライキが多発するようになった。そのため政府は、労働者の生活向上の政策や制度を強化せざるを得なくなった。労働者階級が社会に対して強い力を持ち始めたわけである。

1990年代になると1980年の恐慌と失業者の増加により、非正規雇用、仕事がない世帯、ホームレスが増えていった。所得格差の拡大に伴い、貧富の差がますます大きくなっていった。

5. 「怒れる若者たち」の出現

労働者階級の人々を描いた小説はこれまでも多く、出版されていた。しかしその中でもとりわ

け、労働者階級に生まれた人々の生活を忠実に描いた作品として、Robert Tressell (1870-1911)の *The Ragged Trousered Philanthropists* (1914)や David Herbert Richards Lawrence (1885-1930)の *Sons and Lovers* (1913)をあげることができる。

また、1950年代になると「怒れる若者たち」(Angry Young Men)と呼ばれる作家たちが表れた。このフレーズは神学者であった Leslie Allen Paul (1905-1985)が描いた自叙伝の表題に由来している。彼らは文学を通して、「エスタブリッシュメント」に対する不平不満を表した。「エスタブリッシュメント」とは“...a collective term for all the traditional upper-class institutions in England, notably the Monarchy, the Conservative Party, the Church, the Services, Oxford and Cambridge, the Public Schools, the upper-class newspapers, and so on.” のことである。^[1]

Angry Young Men と呼ばれる作家と作品は、John Osborne (1929-1994)の *Look Back in Anger* (1956)、Kingsley Amis (1922-199)の *Lucky Jim* (1954)、John Wain (1925-1994)の *Hurry On Down* (1953)、Iris Murdoch (1919-1999)の *Under the Net* (1954)、Philip Larkin (1922-1985)の *The Less Deceived* (1955)、Colin Wilson (1931-2013)の *The Outside* (1956)、Alan Sillitoe (1928-2010)の *Saturday Night and Sunday Morning* (1958) と *The Loneliness of the Long-Distance Runner* (1959)、John Braine (1922-1986)の *Room at the Top* (1957)などである。これらの作家の出身階級は、いずれも中流階級もしくは労働者階級である。

6. Alan Sillitoe と John Braine

Sillitoe と Braine には3つの共通点があった。それは労働者階級出身、低学歴、結核という3つである。

Sillitoe は Nottingham 出身で、彼の両親は労働者階級であった。彼は中学卒業後、すぐに働きに出た。18歳で空軍に入隊し、結核を患った。入院期間中は、多くの本を読むことが、何よりも楽しいことであった。そしてこのことが、作家への道を志すきっかけとなった。

一方 Braine は Bradford 出身で、労働者階級の両親の下に生まれた。Saint Bedes grammar school を卒業後、16歳で働きに出た。20歳で軍隊に入り、結核を患った。彼は入院以前から、フリーランスで雑誌や新聞に小さな記事を掲載していた。しか

し結核での入院期間中、強い創作意欲と彼が生きていたという証しを残すために、小説を書き始めるようになった。彼にとっても結核は作家を志すきっかけとなった。

7. 課題

今後は Alan Sillitoe の *Saturday Night and Sunday Morning* と John Braine の *Room at the Top* に焦点を当てる。2人の作者がどのような意図で小説を描き、階級をどのように考えていたのかということとを考察していく。

8. 付記

本論文は、大妻女子大学人間生活文化研究所大学院生研究助成(DB2616)の助成を受けたものである。

引用文献

[1]Hagger, A. Nicholas 上田和夫 訳註. “Angry Young Men and After”. 『英語研究』. 東京: 研究社. 1965. p.11.

主要参考文献

[1]“Cook attacks Whitehall ‘elitism’.” BBC News. http://news.bbc.co.uk/2/hi/uk_news/politics/766068.stm. (accessed 2014-4-15).

[2] John O’Leary. “Brown is blamed for fall in applicants to Oxford.” THE TIMES.

<http://www.thetimes.co.uk/tto/news/uk/article1959913.ece>. (accessed 2014-4-16).

[3]“Chancellor attacks Oxford admissions.” BBC News.

http://news.bbc.co.uk/2/hi/uk_news/education/764141.stm. (accessed 2014-4-16).

[4]Fellowes, Jessica. “War.” *The World of Downton Abbey*. London: HarperCollins. 2011. pp. 228-263.

[5]Atherton, S. Stanley. “An Individual Record: Sillitoe’s Apprenticeship to his Craft.” *Alan Sillitoe: A Critical Assessment*. London: W. H. Allen. 1979. pp. 24-30.

[6]“John Braine (1922-1986).” *Concise Dictionary of British Literary Biography Volume Seven: Writers After World War II, 1945-1960*. 1991.

[7]エージェル, ステイーヴン著 橋本健二訳. “第1章 階級の古典的理論.” “第2章 現代の階級理論.” 『階級とは何か』. 東京: 青木書店. 2002. pp. 9-63.

[8]藤本武. 『イギリス貧困史』. 東京: 新日本出版社.

Abstract

Social class is one of the notable features in English literature. I think British government tries to downplay the social class system at present. However, this system has great influence on culture, occupation, education and so on in British daily life. Problems concerning the social classes often have broken onto the surface of life. My research focuses on the novels concerned with this aspect of society in the twentieth century. My study is about the changing social stratum and the novels as its reflection.

(受付日: 2015年7月6日, 受理日: 2015年7月31日)

松岡 美香 (まつおか みか)

現職: 大妻女子大学大学院人間文化研究科修士課程2年